

下

船戸与二流沙の塔

KYUSA NO TÔU
Funado Yoichi
朝日新聞社

流沙の塔
壺戸与二下

江苏工业学院图书馆
藏书章

朝日新聞社

流沙の塔（下）

一九九八年五月一日 第一刷発行
一九九八年七月一日 第四刷発行

著 者 船戸与一

発行者 岡本行正

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地五―三―二

電話 〇三―三五四五―〇一三一（代表）

編集・書籍編集部 販売・出版販売部

振替 〇〇―一〇〇―七―一七三〇

印刷所 大日本印刷

※定価はカバーに表示してあります

流沙の塔(下) ●目次

第四章 蜃気楼の向こう

7

第五章 枯骨の遺跡

145

第六章 沙塵の彼方

293

流沙の塔（上） ● 目次

第一章 夜の十字路

第二章 雨と月と風が

第三章 寂寞の陽光



装丁 吉田篤弘

写真 水村 孝

(朝日新聞社出版写真部)

地図 吉沢スタジオ

流沙の塔(下)

第四章

蜃気楼の向こう

イーニン 一九九七年八月十日白昼

雪嶺賓館のエントランスを出て、海津明彦は間垣浩市とともにサンタナの後部座席に乗り込んだ。時刻は午後三時を過ぎている。蒼天には雲ひとつなく、風は北から南へと流れていた。運転席では黄利光がすでにステアリングを握って待っている。劉定伯はホテルに残った。昨夜から下痢が止まらないと言ってる。天山山脈の山間の町イーニンに着いてから二日が経過していた。ここは新疆ウイグル自治区のなかのイリ・カザフ自治州の州都だ。昨日の午前中に覗いてみたが、イーニンの南の外れに流れるイリ河はカシ河とキュネス河、それにテケス河が合流してできている。それはカザフスタン共和国のバルハシ湖に注ぎ込むらしい。ここから国境までは九十キロ。街全体が活気に溢れているのはそのせいだろう。利光がアクセルを踏んだ。サンタナが動き出した。明彦は煙草に火を点けながら浩市に言った。

「この標高はどれぐらいあるんですかね？」

「さあな、わしも知らん」

「ウルムチに較べると雲泥の差ですね。風は爽やかだし、気温も相当低い」

浩市も煙草を取りだして銜くはえた。明彦はライターを擦って炎を向けた。マイクロ・フィルムはいまははいっていない。紫煙が吸い込まれた。イーニンに着いてから浩市はすぐにミハイル・セベルスキーという老人と連絡を取った。六十年以上もむかしからの知りあいらしい。だが、すでに死亡していた。その息子が電話口でそう言ったのだ。浩市はイーニン出身の二十代半ばのロシア人女性の動静をよく知ってる人間を紹介して欲しいとその息子に頼み込んだ。ダニレフスキー夫妻の名まえが挙げられた。この夫婦はふたりともイーニンの中学校教師だった。浩市は中学校に電話を入れ、きょうの三時半に自宅で逢う約束を取りつけた。東梁街百九十三段。それがその住所だ。どのあたりだかは利光がすでに調べてある。サンタナはそっちに向かって新華東路を走りつづけた。浩市が銜え煙草のままぼそりと言った。

「どう思う、劉定伯のことを？」

「何がです？」

「ほんとうに下痢かね？」

「そう言っていました」

浩市は煙草を唇から離してごぼごぼと咳をした。明彦はその横顔をちらりと眺めやった。ウィンドウの向こうにはイスラム寺院の尖塔が浮かびあがっている。浩市が咳き込みを終えて言った。

「肌の色艶が落ちてない、ホテルから出られないほどの下痢にしてはな」

「仮病を？」

「かもな」

「しかし、何のためです？」

「わからんよ、わしには理由なんてな」

サンタナのスピードが落ち、ステアリングが左に切られた。新華東路から東梁街へはいった。道路の両側は露天商たちでごったがえしていた。しばらくはバザール街がつづくのだろう。そこで動いている人影はどれもカザフ人だった。

「もうひとつ気になることがある」

「何です？」

「昨日の昼食中に定伯が妙なことを洩らした」そのころ明彦は利光とともにイリ河を眺めに行っていたのだ、ふたりが雪嶺賓館で何を喋ったのかはもちろん聞いていない。「きみのことをこう言った、女にだらしがない日本人だとね」

明彦は無言のまま紫煙だけを吸いつづけた。

浩市が低い声で言葉を重ねた。

「弱味を握られてるね。張龍全のひとり息子の子嫁のことか？」

何も言えなかった。この老人の勘の鋭さには舌を巻くしかないが、それでもここはひたすら質問を無視するしかないだろう。煙草はまだ半分も喫ってなかったが、それを開けたままにしているウィンドウの向こうに投げ棄てた。

「いい女なのかね？」

「どういう意味です？」

「面倒を引き受けるほど価値がある？」

「やめてください、そんな言いかたは……」

「気をつけたほうがいい」

「何をです？」

「いづれ見抜かれる、龍全に」

サンタナがやがて壁を黄色く塗った小さな家のまえに着いた。ここが東梁街百九十三段らしい。あたりは人家が密集してゐるわけではない。しかし、どの家も明らかに中国人の建てかたとはちがつた。帝政ロシアの提督コルチャークの残党として住みついたコサツクの末裔たちはここで寄り添うように生きているのだらう。エンジンを切つて黄利光が北京語で言つた。

「待つてゐよ、おれはここで」

「そうしてくれ」間垣浩市が後部座席のドアを開けながら言つた。「そんなに長くはかからないと思う」

海津明彦もサンタナを降りた。

ふたりで戸口に近づき、呼び鈴を鳴らした。

扉が引き開けられ、四十半ばの痩せたロシア人が姿を現した。力仕事や荒っぽい真似とは無縁な眼つきをしている。中学校教師という職業柄だらう。明彦は新東洋物産貿易部投資環境調査課主任の名刺を差し出した。ここでは日本からのビジネスマンで押し通すことに決めていた。三人のロシア女にまつわる作り話もすでに脳裏に刻んである。浩市も疆日興商の名刺を出した。ロシア人はそれを受け取つてすこし癖のある北京語で言つた。

「お待ちしました。わたしがダニレフスキーです。イワン・ダニレフスキー。さあ、なかにはいつてください」

明彦は浩市とともに狭い居間に案内された。

ソファのそばに三十六、七の女が立っていた。

「家内のエリザベータです」ダニレフスキーが紹介した。「わたしは数学教師で、家内は美術を教えます」その声をエリザベータに向けた。「紅茶を頼むよ、苺^{いちご}ジャムをたっぷり入れて……」

エリザベータがこつちに会釈して居間から出ていった。

明彦は浩市と一緒にソファに腰を落とした。居間のなかは小ざっぱりしていた。贅を凝らしてゐるわけではないが、調度品や窓のカーテンも落ちついた雰囲気を感じだしてゐる。壁に掛けられた三点の風景画は美術教師たるエリザベータが描いたものかも知れない。明彦は向かいに座ったダニレフスキーに言った。

「はじめてですよ、ロシア人のお宅を訪問するのは……」

「わたしたち夫婦には子供がいませんものでね、まあまあ暮らしていますが、他の連中はたいへんですよ。何しろ、ロシア人は改革開放のバスに乗り遅れてゐる。むかしからロシア人は商売下手^たでして……」

「新疆のロシア人はほとんどがこのイーニンに？」

「コルガスやチョチャックにもかなりいます。両方ともカザフスタンとの国境の町ですがね、そこにいる連中もやはりコルチャーク提督に率いられたコサックの末裔ですよ。ただ、コルガスやチョチャックのロシア人の子弟は中学の高等部になるとイーニンの寄宿舎にはいります。教育の問題がありますのでね」

エリザベータがこのときトレイに紅茶のカップを載せて居間に戻ってきた。ダニレフスキーのそばに座り、四つのカップをテーブルに並べた。

「それにしてもお上手ですね、北京語」ダニレフスキーが紅茶を勧める仕草をしながら言った。
「どこで覚えられました?」

「うまくはありません。しかし、職業上の必要から覚えざるを得なかったんです。覚えたのは日本ですよ」

ダニレフスキーはおおげさに頷いてみせた。

明彦は苺ジャムのはいつた紅茶に口をつけた。そろそろ用件にはいらなきゃならない。ポケットから三枚の写真を抜きだした。それをダニレフスキーに差し向けた。

「何です、これ?」

「ここへ伺ったのはその三人のロシア女性のことを知りたいからです。ご存じですか、その三人を?」

ダニレフスキーは手渡された三葉の写真を一葉一葉めくりはじめた。眼差しに当惑の色は隠せなかった。三人の女と面識があるのだ。浩市の想像どおり、殺されたロシア女はこのイーニンの出身なのだろう。その視線が傍らのエリザベータに向いた。エリザベータが写真を引き寄せた。ダニレフスキーがおずおずとこっちを見た。

「ご存じなんですネ?」

「え、ええ」

「教えてくれませんか、だれなのかを……」

「そのまえにお聞きしたい」

「どうぞ」

「写真を撮ったのはだれです?」